

『だれかの笑顔のために』

命の重さ 6月は、「心のきずなを深める月間」です。

すべての人の命の重さは同じでなければいけません。この命の重さに差をつけることが、「差別」であり「いじめ」であると私は理解しています。「いじめ」「自殺」のニュースが絶えないなかで、尊い命がこれ以上犠牲にならないことを祈らずにはいられません。



今から21年前のことです。私は県北の中学校に勤務していました。その中学校でも、部落差別をはじめすべての差別をなくすために、熊本県人権子ども集会への参加をはじめ、様々な人権学習に取り組んでいました。親子人権コンサートも実施し、親子で人権について考えるきっかけとしました。

しかし、学校のなかで、自分がむかついたときや相手の話や行動の意味が分からなかった時などに、相手をバカにするために「障がい」を意味する差別的なことばを使っていることが分かりました。さらには、そのことばを何も知らない小学生に伝え、差別をなくすどころか差別を伝え広げていた状況も分かってきたのです。

当時、人権教育指導教諭という立場で仕事をしていた私は、このことのおかしさを全生徒に考えてほしいという思いから、担任の先生方をお願いし、すべての学級で授業をしてもらいました。その際、子どもたちに次のような私の思いを伝えたくて、担任一人一人の思いを語っていただきました。

昨年、私のいとこの子どもが生後数十日で亡くなりました。未熟児で生まれ、体に「障がい」があり、そのために生き続けることができなかったのです。身内だけの葬儀に出席しました。いとこは、「この子は小さな身体で数十日間一生懸命生きようと頑張ってくれました。ほめてやって下さい。」と話してくれました。

私たちの心ない言葉が、どれだけ人の心を傷つけるのか考えてほしいのです。

担任の先生の話をお聞き、自分が感じたこと、考えたことを書いてみてください。すべての生徒が楽しく生活できる学校にするためにも、しっかり考えてください。

その後、あるクラスでは、友達の言葉遣いについて、「この前勉強したでしょ。」とお互いに注意しあう状況が生まれたと聞き、取組の成果を感じたことを覚えています。その時の一人の生徒の感想を紹介します。

私のいとこは障がい者です。話すことも自分で自由に動くこともできません。いとこと同じ「障がい」を持っている人をバカにするようなことはあってはならないと思います。「障がい」は自分が望んで手や足が動かなくなったり、しゃべれなくなるわけではない。「障がい」を持っている人も望んでそうなったわけじゃない。なのに見下されたりしたらどう思うか。とてもつらく、そして悲しいと思う。「障がい」を持っている人はその自分にしかない「障がい」を自分の最大の自慢としている人もいる。それをけなされたら、その人はどうなるだろうか？ 私たちに感情があるように、体が動かなかったり、しゃべれない人でも、顔の表情で自分の思いを出している。私のいとこも、怒ると“ヴー”とうなったり、泣いたり、うれしいときは、顔が穏やかで、もっと嬉しいときは“キャッ”と声を出したり・・・。ただどこかが普通の人と違うだけで、知らない人からバカにされなくてはならないんだろう。絶対それはおかしいと思います。(中学2年生)